

名古屋城から文化遺産を考える（中学3年）

奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 中澤静男

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名 名古屋城から文化遺産を考える 中学校3年生

(2) 単元の概要

本単元は、名古屋市のランドマークである名古屋城を題材に、文化遺産に危機的状況をもたらすものについて考え、自己の生き方を振り返ることを通して持続可能な社会づくりの担い手に求められる価値観のひとつである平和の文化を尊重する態度を育てることを目的としている。

① 名古屋城について

名古屋城は、1600年の関ヶ原の戦いで勝利を得、江戸幕府を開いた徳川家康が、大阪城の豊臣秀頼との武力衝突に備えて築城・拡張した城の一つである。1610年に将軍徳川秀忠の命により、秀吉恩顧の西国の外様大名を動員した天下普請の城である大阪への備えとともに、豊臣氏に加担のおそれのある者の財力の消耗させるのがねらいであったと言われている。名古屋城は名古屋台地の西北端に位置しており、台地の西面と北面が高さ10メートルの断崖になっているほか、断崖の下には泥沼が広がり、その西には庄内川、木曾三川が流れるなど、西からの攻撃を意識した天然の要害の地に築城されている。また、名古屋城は本丸、二之丸、西之丸、御深井丸、三之丸の五郭にわかれており、本丸には金の鯨で有名な天守閣、小天守、御殿、西南櫓がある。

② 金の鯨について

名古屋城のシンボリック存在として金の鯨がある。城郭の大棟の上に鯨を掲げることは、室町時代前期ころから、火事を防ぐまじないとして広まっていったと言われている。名古屋城の金鯨は、家康の権力・財力を誇るにふさわしく、金の純度は80%であった。

金鯨の大きさは、文政10年の記録によると次のようなものであった。

	全長	うろこの数
雄	2.57メートル (8尺5寸)	194枚
雌	2.51メートル (8尺3寸)	236枚

作り方としては、樫材（さわら、後にはヒノキ）で荒彫りにつくった心木に鉛板を貼り付け、さらに銅板で覆い、その上に大判小判を薄く延ばした金を張ったものであり、金の量は慶長大判で1,940枚、小判にして17,975両というものであった。

その後江戸時代に3回、藩の財政が逼迫したときに、金鯨を取りおろし、金鯨を鋳直している。

③ 金鯨のない天守閣

名古屋城のシンボリックな存在である金鯨は、ずっと天守閣にあったと思われているが、そうではない。明治2年の版籍奉還後、明治3年の藩議において、旧物破却の時流にのっとり、城郭並びに金鯨を取り壊して金に換え、禄を離れた旧藩士の帰農および生計資金と、城跡整理の費用に充てることを決議し、新政府に請願している。その頃駐日ドイツ公使であったフォン・ブランドが、名古屋藩知事

と政府に対して破却中止の勧告を申し入れたため、藩では金鯢の売却を思いとどまり、宮内省に献上することとなった。献上された金鯢のひとつは明治5年にオーストリアで開催された万国博覧会に出品され、もうひとつは、全国各地の博覧会に陳列された。その後、名古屋の豪商代表9名と県令が政府に金鯢返還の請願を提出し、明治12年に8年ぶりにもとの天守閣上に復帰した。【責任性】

名古屋城の金鯢のような有名な文化財でさえ、人々の考え方、人々の無関心によって失われる可能性があることを、この事実は示している。奈良の仏像などの文化財を廃仏毀釈から救ったのがアメリカ人フェノロサであり、金鯢や名古屋城を救ったのがドイツ公使フォン・ブランドであったという共通点から、大切なものでもそれが身近であたりまえのものであればあるほど、人々からは見えなくなってしまう傾向にあり、身近な文化遺産を再度見つめ直すことの大切さを示唆してくれるものである【相互性】。

④ 金鯢の蓬左文庫

しかし、この金鯢の取りおろし・献上には、別の味方も存在する。名古屋には今も蓬左文庫と呼ばれる尾張徳川家が所蔵していた和漢の優れた古典籍が所蔵されている文庫がある。蓬左文庫の始まりは、1616年の徳川家康の死去に際して尾張家に譲られた駿河御譲本と呼ばれる家康の蔵書3000冊である。その後歴代藩主による書物収集により蔵書が拡大され、幕末期には5万点になっていたと推察される。この蓬左文庫を守るため、金鯢を差し出したという意見がある。開庁後間もない名古屋藩庁としては、新政府に対し恭順の意を示すために金鯢を差し出したが、本当に大切な蓬左文庫は出さずに守ったという意見である。

⑤ 金鯢と名古屋城の焼失

築城が日本城郭史上の再後記であり、一度の戦争も経験せずに明治をむかえた名古屋城は、名古屋鎮台の設置に伴い、次々に陸軍の施設が建てられたものの、天守閣や本丸御殿などは保存されていた。しかし、1945年5月14日の空襲によって焼失してしまう。天守閣の石垣をよく見ると、当時炎上した傷が、焦げ跡となって残っているのがわかる。

(3) ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅱ 相互性 名古屋城の石垣の構築の技術が韓国のものであったり、金鯢を救ったのがドイツ公使フォン・ブランドであったことなどから、文化交流の大切さを学ぶことができる。

構成概念Ⅵ 責任性 金鯢の取りおろしを通じて、文化遺産を次の世代に伝えていくことの重要性和困難さを理解するとともに、名古屋城の焼失から平和の文化の大切さを学ぶことができる。

2. ESDの視点を生かした授業の実際

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《批判》

金鯢の取りおろしを通じて、身の回りで当たり前の存在となっている文化財や伝統行事などを見直し、文化遺産の保護や平和の文化について考えることができる。

《多面的》

金鯢と蓬左文庫の関係など、ひとつの歴史事象を多面的、総合的に考えることができる。

《伝達》

グループでの調査活動やインタビュー、聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしようとする力を養うことができる。

《関連》

身近な文化財や伝統行事などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度。

(2) 評価規準

関連 関心・意欲・態度	批判・多面 思考・判断・表現	伝達 技能	多面 知識・理解
① 名古屋城や金鯨、蓬左文庫の見学調査など、積極的に学習に取り組んでいる	① 身近な文化遺産を見つめなおし、その価値を考えている。 ② 金鯨の取りおろしから文化財保護について多面的に考えている。	① グループでの調査活動やインタビュー、聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしている。	① 金鯨と蓬左文庫の関係など、ひとつの歴史事象を多面的、総合的に考え、理解する。

(3) 単元展開の概要 (全8時間)

主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
1. 名古屋城に関するDVDを視聴し、見学計画を立てる。(1)	◇ 「プロジェクトX名古屋城再建 金のシャチホコに託す」を視聴させ、名古屋城見学への関心を高める。
2. 名古屋城と蓬左文庫を見学する。(課外活動) ・ 名古屋城の魅力について観光客へのインタビュー。 ・ 名古屋城の石垣に掘られた文様 ・ 石垣を築く技術	◇ グループ単位で観光客に名古屋城の魅力についてインタビューさせる。 ◆ インタビューや見学調査に積極的に取り組んでいる。《関連》 ◇ 石垣に掘られた様々な文様を見つけ、関心を高める。
※ 見学できない場合は、名古屋城ホームページを参照する。 http://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/	◇ 石垣を築く技術が韓国伝来のものであったことを知らせ、国際交流の大切さに気付かせる。
3. 名古屋城の魅力について話し合う。(2) ・ インタビュー結果をグループごとに発表する。 ・ 自分たちで見つけた名古屋城の魅力を発表する。	◇ 名古屋城にとって、金鯨の重要性を確認する。 ◇ 金鯨がなかった天守閣の写真を掲示しその理由を考えさせる。
なぜ、金鯨を取りおろしたんだろう。	



金鯨のない天守閣 (明治5年頃)

4. 文化遺産の保護について調べる (4)

- ・ ドイツ公使フォン・ブランドの貢献から、身近な文化遺産再発見のための調査活動を行う。
- ・ すでに失われてしまった文化遺産、伝統行事についての聞き取り調査
- ・ 身近な文化遺産の価値を調べる

5. 調べたことの交流 (2)

- ・ 身近な文化遺産、既に失われてしまった文化遺産について、グループで調査したことを発表する。
- ・ 保護者や地域の方も招き、身近な文化遺産の価値やその保護の大切さをうったえる。

◆ 金鯨を取りおろした理由を多面的、総合的に考えている。《多面》

◇ 明治維新の頃の歴史的背景を踏まえてキーワードを提示し、グループごとに考えさせる。
キーワード

- ・ 版籍奉還、殖産興業、脱亜入欧
- ・ 蓬左文庫

◆ 金鯨と蓬左文庫の関係など、ひとつの歴史事象を多面的、総合的に考え、理解する。
《多面》

◇ ドイツ公使フォン・ブランドの行動を紹介する (さらに奈良でのフェノロサの演説について紹介したい)。

◆ 身近な文化遺産を見つめなおし、その価値を考えている。《批判》

◇ 文化遺産は過去の人々の声を聴く手がかりであり、それを保護するということが、過去の人たちの意思を受け継ぎ、将来世代に伝えていくことであることを踏まえ、自分ができることを考え、発表させる。

◆ グループでの調査活動やインタビュー、聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしている。《伝達》

参考文献

- 『特別史跡 名古屋城』山田秋衛著、名古屋城振興協会編集・刊行、1966年
『特別史跡 名古屋城いまむかし』服部鉦太郎著、名古屋城振興協会編集・刊行、1995年
『知れば知るほど好きになる名古屋城』名古屋城検定実行委員会企画・編集、名古屋城振興協会発行、2011年